

本音のコラム



石原慎太郎氏は暴言の多い人だった。「文明がもたらしたもつとも有害なもの」は「ババア」「三国人、外国人が凶悪な犯罪を繰り返している」。暴言の多くは、女性、外国人、障害者、性的マイノリティなどに対する差別発言だったが、彼は役職を追われることも、メディアから干されることもなかった。そんな「特別扱い」が彼を増長させたのではなかったか。

彼は生涯現役の作家だった。晩年に至ってもベストセラーを連発した。だが、作家としての石原慎太郎の姿勢にも私は疑問を持っている。朝日新聞の文芸時評を担当していた二〇一〇年

無責任な追悼

二月。「文学界」三月号掲載の『再生』には下敷き(福島智)「盲ろう者と生きて」。当時は書籍化前の論文)があると知り、両者を子細に読み比べてみたのである。と、挿話が同じなのはともかく表現まで酷似している。三人称のノンフィクションを一人称に書き直すのは彼の得意技らしく、田中角栄の評伝小説『天才』も同様の手法で書かれている。これもまた「御大・石原慎太郎だから」許された手法だったのではないか。

各紙の追悼文は彼の差別発言を「石原節」と称して容認した。二日の本紙「筆洗」は「その人はやはりまぶしい太陽だった」と書いた。こうして彼は許されていく。負の歴史と向き合わず、自らの責任も問わない報道って何? (文芸評論家)

2022.2.9

記憶つなぐ 84の竹あかり

東日本大震災から丸11年となる3月11日、津波で犠牲になった宮城県石巻市旧大川小児童の遺族らが、手作りの竹灯籠を使った追悼行事を旧校舎そばで開く。児童74人、教職員10人の犠牲

者と同じ84本の竹筒に明かりをとます。大川小が昨年7月に市の震災遺構として整備されて初めて迎える節目。未来を照らす光に事故の記憶を語り継ぐ決意を込める。



演出家の池田親生さん(三宅) 熊本県南

竹灯籠に使うために切り出した竹= 1月30日、宮城県石巻市で

旧大川小遺族ら 3・11行事

関町IIが竹灯籠を。池田さんによ

遺族らでつくる「大川竹あかりプロジェクト実行委員会」が企画した。当日は旧校舎西側の「慰霊と追悼の広場」に発光ダイオード(LED)電球を使った竹灯籠を設置。午後五時半に明かりをつけ、遺族や地域住民、訪れる人と犠牲者へ追悼の祈りをささげる。

「未来と過去を託す。池田さちが生きていたなきたい」と話

震災から十一は大川小事故やることに危機感

一月三十日に川小に近い石巻となる竹を切り切りそろえた約実行委の共同だった三英雄樹で失った佐藤和の取り組みで携わってもらいと語る。

と思われる。業界の信用に ころした福島県の風評被害

あるのは事実。ただ、近藤のネット上で「風評被害で

話題の発掘